

みんなで歩こう！ 美濃路

東海道熱田宿(宮宿)から、名古屋、清須を経て垂井で中山道と合流する美濃路。
天候等に影響される熱田～桑名の東海道の海路のバイパス。
6つの宿場があり、全長は約58km。
戦国時代には信長の桶狭間、秀吉の小田原征伐、家康も関ヶ原の戦いで凱旋した街道となりました。



episode
信長が遊んだ庄内川
庄内川左岸には成願寺河原、名塚河原、枇杷島河原の3つの河原があり、この枇杷島河原は、下流の中村区稲葉地にかけて広がる大きな河原で、河原といえばこの地を指していたほどです。茶せん髷に、腰に色々なものをぶら下げた古法師時代の信長は、近在の子供たちと、ここでよく遊び、そんな稚児集団のひとりが日吉丸(後の秀吉)でした。

感じて! お江戸の情緒と庶民の元気!



しゅめから 四間道 C-4
名古屋に城下町ができるまで、尾張の中心地は清須(きよす)でした。しかし、徳川家康の命で名古屋築城とともに名古屋の街が作られ、清須から武士・町人・寺社などがそろって移動。これが有名な「清須越」です。城下町は計画的に作られ、身分により居住地を分割。堀川の両側には、水運を利用する商家が立ち並び、物資の集散を行うため商家の玄関は堀川側を向き、土蔵は家の裏手に作られました。堀川に沿って土蔵が立ち並び四間道は、こうしてできたものです。名古屋市内並み保存地区指定、都市景観賞受賞。

伊藤家住宅 (愛知県指定文化財)
伊藤家は慶長19年(1614)に移住した清須越十人衆の商人で、現在の伊藤家は分家にあたり、享保7年(1722)現在地に移住しました。松坂屋の始まりである伊藤家と区別して川伊藤家と呼ばれます。江戸中期の住居と元禄期の防火建築の典型の土蔵は、昭和39年名古屋市指定文化財。昭和62年愛知県指定文化財。

なぜ「四間道」というの?
元禄13年(1700)の大火により、1640軒余りの町屋が焼失。そこで尾張藩4代藩主の徳川吉通(とくがわよしみち)は、商家の延焼を避けるため、堀川沿いの商家の裏道幅を4間(約7m)に拡張させ、それが語源となったともいわれています。「温泉道」「四軒道」が由来との説もあり。



五条橋 C-4
五条橋は、名古屋城築城と同時に開削された堀川で初めて架けられた橋です。元は清須を流れる五条川に架かっていたが、「清須越」の際一緒に移されました。その後、何度も改築され、現在の橋は昭和13年のもの。鉄筋コンクリート造りであるものの、木橋の形をそのまま残していて、石の欄干、石畳、御影石の親柱、擬宝珠(ぎぼし)が特徴。名古屋市の都市景観重要建築物に指定されています。

円頓寺商店街 B-4
堀川から西に延びる商店街は、円頓寺などの門前町として発展。大須と並び、名古屋を代表する商店街です。

岩倉街道 B-2
名古屋城築城後、岩倉方面から野菜類を枇杷島市場や下小田井市場へ運ぶ人が往来した街道。この辺りには、食事や生活用品などを扱う商家が建ち並び、賑わいました。名古屋市内並み保存地区に指定され、格子のはまった古い町屋が、街道の微妙な屈折とあいまって、江戸の昔にタイムスリップしたような錯覚が楽しめます。

明道町 B-4
西区には駄菓子製造業者や玩具製造・問屋が集まっており、その中心となるのが明道町(めいどうちょう)です。昭和30年代に全国シェアの3割を占め、菓子の出荷額トップとなったほどです。

円頓寺七夕まつり
7月末ごろに毎年開催される祭り、アーケードには、各店舗などが作成した張りばてや装飾、出店などが並びます。装飾の張りばては、毎年審査が行われ、賞が授与されるなど地域の話題となっています。

岩倉街道おてあ祭
かつてこの道を通って枇杷島の青果市場へ野菜を運んだことにちなみ、野菜をかたどった山車が登場します。

それは 屋根神さまです!
まちのあちこちで見かけるコレなに?
名古屋市内109ヶ所、その内55ヶ所が西区に!
※2015年12月現在
家屋の一隅ひさし屋根や、軒下などに設置された神さま。火伏の秋葉神社や厄よけの津嶋神社のほか、氏神(名古屋では熱田神宮)を祀り、町内や隣組といった地域の小組織で祭祀を行います。屋根に祀ることから「屋根神」と呼ばれるようになり、住宅開発が進む現在では、屋根から下ろしている所もあります。ちょっと気をつけながら散策すると、あちこちで見かけることができますよ。

名古屋友禅
尾張藩の質素な気質を映し、色数を抑えた淡い単彩濃淡が特徴の名古屋友禅。尾張藩主徳川宗春の頃(1730～1739)から始まったとされ、糸目糊友禅(いとめりゆうぜん)と呼ばれる本友禅は手書きから仕上げまで一人の作業が費やります。国指定伝統的工芸品。
和風
日本の伝統的な絵画の手法を今に伝える名古屋の和風。原画づくりから型紙、刷り込み、組み立てなど、どれも熟練の技を駆使して作られています。最近では、昔ながらの絵模様に加えて、工夫を凝らしたデザインが特徴となっています。
名古屋扇子
名古屋扇子は、宝暦年間(1751～1764)に京都からの職人によって伝えられ、今では全国シェアの約3割を占める屈指の産地に。特に、結婚式などに使う祝儀扇、紳士向けの25間(扇骨の本数、35間などに人気があり、儀式に使われる白扇は名古屋扇子の特産といえます。

伝統の職人技
江戸時代から、まちの発展を支えてきた伝統技。そんな職人さんたちが西区では数多く活躍しています。
名古屋提灯
室町時代にはさかのぼる提灯づくりは、盆供養ともなつて江戸時代に盛んとなりました。小田原提灯、岐阜提灯と並ぶ名古屋提灯は、和紙を通した柔らかな光が欧米人に好まれ、明治初期には輸出産地として全国を誇りました。
名古屋製靴 レザークラフト
革靴づくりが非常に盛んだった昭和30～50年代、上質な本革の靴づくりの地として全国的にも有名に。高度な技術を誇る製靴業が発展しました。バッグなどのレザークラフトにも発展。
名古屋古流風
「虹・蟬・蜂」といった昆虫の形をした独特の扇。これが名古屋古流風で、江戸時代初期の寛永年間(1624～1645)から始まったとされます。小型で独特のうなり音を発するため、江戸の昔から武士の遊びや自慢比べとして発達してきました。
名古屋の駄菓子
名古屋城築城の石運び人や、西枇杷島市場に集まる八百屋、美濃路の休憩所の旅人や人足衆を相手に販売された駄菓子。その歴史は江戸時代までさかのぼり、関東大震災を機に、名古屋の駄菓子は生産・流通機能が拡大し全国で有名になりました。